



アダム・スミスの生涯と時代

1723.6.5 アダム・スミス誕生

1737 グラスゴー大学入学

1740 オックスフォード大学
ベリオリカレッジ入学

1751 グラスゴー大学で教鞭をとる

1759 『道徳感情の理論』

1764 渡仏

1776 『国富論』

1790.7.17 病没

1733 ジョン・ケイ

1735 ダービー

1740 ハンツマン

1764 ハーグリーブズ

1765 ワット

1769 アークライト

1776 アメリカ独立宣言

1779 クロンプトン

1793 ホイットニー

(1)資本主義の確立

(2)資本主義の基礎構造に関するイギリス・ブルジョアジーの自己認識

(3)資本主義の進歩的性格

(1)古典派経済学の成立

(2)経済学がはじめて体系化

(3)19世紀の前半から約1世紀の間、イギリスのみならず世界の経済学



経済学と道德哲学

- 道德哲学とは？
 - 個人の行動を外から押さえ込むためのものではなくて、各個人が生存と幸福のために営む行動が、他人のそういう行動と矛盾対立せずに、社会的に平和的共存可能かをたずねる学問
- スミスの主張
 - 諸個人相互の間で、おのずから秩序が形成され、維持される
 - 個人の生存と幸福のための活動（利己的活動）を、同時に経済学の対象とした





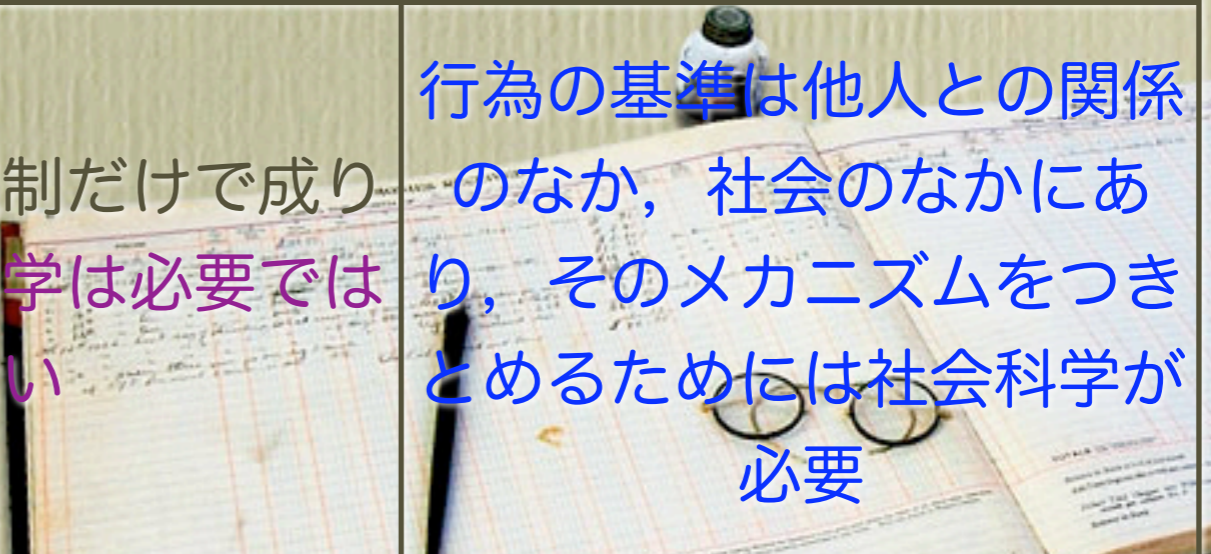
同感 (Sympathy)

- 日本語の同情, あわれみ
 - 『広辞苑』 「同感」 : 「同じように感ずること。同じ考え。」
 - 同, 「同情」 : 「他人の感情, 特に苦悩・不幸などをその身になって共に感ずること」
- ルソーとの違いとスミスの独自性
 - Jean Jacques Rousseau 1715-78も利己心を制御するものとして「あわれみ」
 - 各個人のなかには行動の原理として利己心があり, これを除去することは必要でもなく可能でもなく, **ただ同じく各個人のなかにあるあわれみの感情が, 利己心のいきすぎを制御すればいい** (『政治経済論』 『百科全書』)



ルソーとスミス

	Rousseau	Smith
人間本質	利己心	
制御	各人の内部に「あわれみ」として存在	各人の外部に他人の気持ちとして存在
社会科学の必要性	秩序は自己規制だけで成り立ち、社会科学は必要ではない	行為の基準は他人との関係のなか、社会のなかであり、そのメカニズムをつきとめるためには社会科学が必要






他人の同感

- 他人の同感の成立
 - 想像上の立場の転換=当人の身になって是認→社会的に正当
 - 他人の同感を得られる程度にまで自己抑制しなければならない
- 第三者すなわち見知らぬ人々の同感
 - 「できるかぎり早く，世間と社会の日光のなかに戻らなければならない」
- 市民社会の意味すること
 - スミスの同感とは，身近な人の温かい同情ではなく，見知らぬ人の冷静な目
 - 公平な，利害関心のない，中立的な第三者の目
 - 市民社会①対等平等な関係，特殊な愛情や利害関係がない②各個人が利己心をもっているからこそ，他人の行動に同感できるのは，等質だからだ





利己心と利他心

- 利己心=人間生存の条件， 利他心=社会の飾り
 - ふつうの人々のふつうの生活のなかでのルール
 - 「富と名誉と地位を目指す競争において，彼は彼のすべての競争相手を追い抜くために，できるかぎり力走していいし，あらゆる神経，あらゆる筋肉を緊張させていい。しかし，彼がもし彼らのうちの誰かを押しつけるか投げ倒すかするならば，観察者たちの寛大さは完全に終了する。それは，フェア・プレイの侵犯であって，彼らが許し得ないことなのである。」
- 



等価交換と正義

- 援助の等価交換, 同感の等価交換
- 等価交換の成立 = 正義
 - これだけは力づくでも維持されなければならない
 - 自由競争の確保 → 等価関係の実現
 - 問題は経済学の領域へ

